

伴野郎

上海 遙かなり



上海 遙かなり



シヤンハイ はる
上 海 遙かなり

1992年1月30日 初版発行

著 者 伴野 朗

発行者 峯島 正行

発行所 有楽出版社

〒104 東京都中央区新富 1-13-24

LMペルコート新富町502

電話 03 (3555) 8766

発売所 実業之日本社

本社 〒104 東京都中央区銀座 1-3-9

電話 03 (3535) 4441 振替 東京 1-326

支局 大阪市北区曽根崎 2-12-7

梅田第一ビル

電話 06 (312) 1573

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 共文堂製本所

乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。

©R.Tomono 1992 Printed in Japan

ISBN4-408-59044-4

目次*上海遙かなり

プロローグ 7

失踪 11

写真 37

疑惑 67

盗掘 96

証言 127

喪

失

158

展

開

188

謀

略

219

亡

靈

248

エ
ピ
ロ
ー
グ

288

装幀・装画／栗屋 充

上海
遙かなり

■主要登場人物

土屋慎介……本篇の主人公。中央日報の上海特派員。

鄭經……土屋の友人で上海紙「文匯報」の記者。

榊善三……土屋の気のおけない友人で、日本の大手建設会社からの出向社員。

劉敏……中央日報上海支局に勤務する土屋の有能な助手。

張濟方……中央日報上海支局の運転手。

曹軍民……上海市近代史資料館研究員。高国栄のペンネームで、上海日報にコラムを書く。

曹秀華……曹軍民の妹。

夏修桐……華東師範大を卒業した曹軍民の主任教授。

孫淑……曹軍民の友人で復旦大学の助手。

江伯均……上海市長。

戴清牙……江伯均上海市長腹心の副市長。

陳沢……江伯均と対立関係にある上海副市長。

潘自強……公安局の主任。

宋君慧……公安局の遣り手女性副局長。

王克林……夏修桐教授の友人で敦煌文物研究所の顧問。

袴田勇太郎……旧軍人。昭和十九年当時陸軍中佐で参謀本部第二部第七課に勤務。

鄭文程……鄭經の実父で、かつて共產黨員として対日工作に従事。

ニコライ・テレビロフ……戦時中コミンテルンの工作員として活躍した中国系ロシア人。

プロローグ

名古屋の上空には黒い雲が低く垂れ込めていた。花冷えしてか肌寒い日である。
市の中心部にある鶴舞公園——。

つい一週間ばかり前には満開だった桜が散り始めていた。

道路に落ちた桜吹雪の名残りの絨毯を踏んで一人の壮漢が、名古屋帝国大学医学部付属病院の門を潜った。三十一、二歳。がっちりした体格で、眼光が鋭い。灰色のソフトを目深にかぶり、濃紺のコートの襟を立てていた。そのコートの肩に、どこでついたのか一枚の桜の花びらが貼りついていた。

男は東南端にある病棟に向った。二階建てで、特等病棟と呼ばれている。病棟の入口は二つあるが、どちらの入口にも屈強な二人の男が立っていた。明らかに私服とわかる特高の刑事である。私服が、男を誰何した。男はコートの前を開け、コートと同色の背広の胸に留めたバッジを示した。梅の花をかたどったものだった。

私服は、それを確かめたあと、頷いて男を通した。その間、三人とも一言も言葉を発しなかった。

病棟は、まるで貸切りのように、がらんとしていた。普通なら特等病棟とはいえ、白衣の看護婦や医師が廊下を往来しているものだが、ここに關しては、その常識が当てはまらなかった。

人影のない廊下に、男の靴音だけが虚しく響いた。彼は事前に命令を受けた通り、二階へ上が

り、右手の鉤の手を曲った。中央のやや手前に、左へ折れる通路があった。特等病棟一号室と呼ばれている一郭である。ドアの前には、これも私服の男が、張り番をしていた。

張り番の男の顔には、特高の刑事の野卑さとは違った知性を感じられた。と同時に、制服を着慣れている男であることもすぐにわかった。

——陸大出の憲兵。

ソフトの男は、見当をつけた。まあ、当たらずといえども、遠からず、といったところだろう。男は低い声で、

「証明書を——」

と、いった。

ソフトの男は、背広の内ポケットから、陸軍省発行の身分証明書を出して、張り番の男に示した。男は、それを手に取って入念にチェックした。どんな些細なことも見逃さない眼であった。

「失礼しました。どうぞお通り下さい——」

男は、低い声で丁寧にいつて、ドアの前を離れた。身分証明書には、

——日本帝国陸軍中佐、袴田^{はかまだ}勇太郎^{ゆうたろう}。

参謀本部第二部第七課勤務。

とあった。ちなみに参謀本部第二部第七課とは、中国・満州担当として知られているセクションである。「業務分担規定」によると、

——中華民國及満州国ノ軍事、国勢、外交、作戦資料及兵要地理ノ調査ニ関スル業務とある。

病室の患者名札には、ただ、

——梅号。

の二字が記入されているだけだった。袴田はドアを軽くノックした。ドアは内側から開いた。ドアに続く部屋は、控えの間だった。三人の男がいた。二人は私服だが、もう一人は白衣を着た医者だった。ドアを開けたのは、私服の若い方の男だった。年とった方の五十近い男が立ち上がって、袴田を迎えた。中肉中背だが、理知的な顔をしている。この男の胸にも、梅のバッジがあった。

「これは、今村閣下——」

袴田は思わず敬礼したが、意外な顔を見た驚きを隠さなかった。

「いつ内地へ？」

「一昨日だ——」

支那派遣軍参謀副長、今村武夫がぶつきら棒にいった。今村が名古屋にすることは、誰が考えても不思議だった。いま支那派遣軍は京漢^{けいなん}打通作戦を開始しようとしている。その大切な時期に、なぜ今村少将は、南京から急遽日本に戻ってきたのか。

この病院に緊急入院した患者に関係あることはわかっていた。袴田は、患者「梅号」の正体を知っているだけになおさらだった。

「手術を執刀された斎藤真博士だ」

今村が、白衣の男を紹介した。袴田も名古屋帝大医学部の外科の権威の名は知っていた。ドアを開けた男は、今村の副官のようだったが、彼は紹介されなかった。

「で、手術は終わったのでしょうか？」

袴田が、訊いた。

「終りました。いまのところ、成功と申し上げていいでしょう……」

斎藤は、ちよつと口籠った。その言葉を引き取るように今村が口を挟んだ。

「絶対安静が三カ月間は必要だ。この間に彼を訓練する。それが、貴公の任務だ——」

袴田は頷いたが、自分でも顔が引きつっているのがわかった。

「責任をもって三カ月後に、閣下のお手元まで送り込みます……」

「ぜひ、そうあつて欲しい。いまの日本には『^{スニッチ}鶯工作』を成功させるよりほかに、この苦境を脱する手はないのだ」

今村が、苦渋に満ちた表情でいった。

「では、鶯を貴公に紹介しておこう」

気を取り直した今村が、副官を促した。彼が隣室のドアを開いた。

そこには一人の老人が、ベッドに寝ていた。六十歳前後、丸顔で、福やかな表情をしている。血色も悪くない。脇に看護婦が一人、付き添っていた。

「袴田中佐、紹介しよう——」

陸軍切つての中国通を自他ともに認める今村が流暢な中国語に切り換えていった。

「こちらが、中華民国国民政府主席、汪精衛^{ワンチンウェイ}閣下である……」

老人が、袴田の顔を見た。袴田は前傾姿勢の礼で応えたが、全身が緊張のため硬直していた。

昭和十九年（一九四四年）四月——。

太平洋の戦局は、日一日と日本に不利に展開していた。戦線の拡大し切った中国でも、勝利は見えてこなかった。

この事態を打開するための極秘の謀略が、ここ名古屋で始まろうとしていた。

失 踪

1

その記事を読んだ時、土屋慎介は、

——おや？

と、思った。彼は、中央日報の上海特派員である。社の正式名称では、上海支局長ということになるが、日本人記者は彼一人である。土屋以外の支局のメンバーは、上海市外国人機構人員服務処なる機関から派遣された助手、運転手、阿姨の三人である。阿姨は、お手伝いさんで、掃除、洗濯、それに単身赴任の土屋のために、昼飯と晩飯をつくってくれる。

土屋は、阿姨の注いでくれる烏竜茶を一口飲んで口に残った茶葉を手で取った。中国の茶は、大ぶりの湯呑みに茶葉を入れ、その上に熱湯を注ぐ。慣れないと、上に浮いた茶葉が口に残ることになる。彼は不器用で、最初の一口は必ずといってよいほど茶葉が残った。

眼は、上海日報の記事を追っている。上海日報は、解放日報、文匯報と並ぶ上海の三大紙の一つである。

その記事は、

——歴史の庭。

というコラムであった。週一回月曜日に掲載されている。筆者は四、五人が交代して書いているようで、きょうの筆者は、高国栄という名だった。肩書きはない。

『歴史の庭』は、なかなか面白いコラムだった。『三国志』の諸葛亮と劉備の「三顧の礼」の故事は実際にあったのか、どうか。あるいは、呉越の争いの臥薪嘗胆のエピソードは本当に実在したのかなど歴史のハイライトに新しい光を当て、新説を紹介している。土屋は、熱心な愛読者だった。そのうちのいくつかは、彼の筆で中央日報の紙面を飾っていた。

きょうのテーマは、

——汪精衛の死の真相。

だった。汪精衛——本名の兆銘よりも、字の精衛の方で有名になっている。国民党の大立物だったが、蒋介石の抗戦救国路線に対して、和平救国の立場をとり、南京に親日政権を樹立した。昭和十九年（一九四四年）十一月、名古屋で客死した。

これが、土屋の頭にあった汪精衛像だった。だが、高国栄の新説は、土屋の常識を覆すものだった。

——長年にわたって、人々は汪精衛は日本で病死したものだ、と思い込んでいた。つまりこういうことである。一九三五年（昭和十年）十一月一日、国民政府行政院長当時、南京で開かれた第四次国民党第六回中央委員会全体会議に出席中、暗殺者の銃撃を受け、彼は負傷した。そのうち一発が背骨の脇に食い込んだままになっていた。その傷口が悪化したため、四四年三月三日、日本軍用機で訪日、名古屋帝大付属病院で手術を受けたが、同年十一月十日、同病院で死んだ。だが、ここ数年、汪精衛の死は、蒋介石が藍衣社（重慶・蒋介石政権の秘密工作機関）の戴笠にひそかに指令し暗殺したものであるとの見方が出てきた。

それによると、真相は次のようになる。

汪精衛は日本で死ななかった。弾丸摘出に成功、三カ月間日本で静養して南京に戻った。彼はひそかに上海に飛び、偽名で虹橋病院に入院した。だが、広州にいた妻の陳璧君に秘密の電報を打ったことを重慶のスパイに察知された。スパイはすぐに重慶にその旨連絡した。報告を受けた蔣介石は、腹心の戴笠に汪精衛の暗殺を指令した。

一カ月後に指令は実行され、売国奴汪精衛は死んだ。南京政権は汪精衛は日本で客死したと発表したが、これは故意に事実を振じ曲げたものである……。

事実とすると、日中関係史を書き換えるニュースだ。

土屋は、もう一口茶を飲んだ。今度は茶葉は口に残らなかった。時間が経ったので、底に沈んだのだ。

時計を見た。午前十時。日本との時差は一時間。いまから送れば、夕刊にはゆっくり間に合う。彼は、電話をとって、東京本社の外報部デスクを呼び出した。出たのは、アジア担当の谷山だった。日ごろから口をききたくないデスクの一人である。よりによって谷山が夕刊デスクとは、ついてないな、と土屋は思った。

「汪精衛は日本で死んだのではなく、上海で藍衣社に暗殺された、という話がある——」

「おうせい、えい？ そんな人、いましたっけ。それにらんいしやとは、なんですか？」

話にならなかった。一応原稿を送るから、しかるべき人に見せろ、と脅迫まがいにいつけた。英語は喋れるが、それだけの男だ。まず、ニュースの価値判断ができないし、アジア担当のくせにアジアの基本知識に欠けている。

送稿したが、午後になっても採用通知がこなかった。夕刊には使わなかった、ということだ。

採用通知とは、紙面に載った記事の見出しと扱い（段数）を、東京本社からファックスなり、電報なりで知らせてくる業務連絡のことである。直接紙面を見ることができない特派員は、採用通知で、自分の仕事ぶりを知るのである。

朝刊で日の目を見ることを期待した。だが、あの谷山では、外勤のデスクにどんな引き継ぎをすることか。悪い予感がした。残念ながら、その予感は当たった。

電話が、鳴っている。

支局兼自宅のベッドのなかで、土屋は反射的に時計を見た。午前七時半。

——チエツ、また間違い電話か。

口のなかで呪いの言葉を吐きながら、のろのろと起き上がった。早朝、外国人宅にかかってくる上海の電話は、その九十九パーセントが間違い電話である。この大都会の電話事情は極端に悪い。個人の家庭電話がまだ少ない。ほとんどが、「公用電話」と呼ばれている公衆電話を利用するのだが、この電話は夜間は使えない。その分が解禁となる早朝に集中するのだが、電話帳が完備していないから、ウロ覚えの番号を回す。それにこの時間帯は、交換機がパンク寸前で、いたるところで混線するときている。

送受話器をとった。案の定、中年女の上海語だ。

「儂啥地方？（お宅はどちら）」

そらきた。土屋に用のある中国人は、北京語を使ってくれる。

「日本中央日報、打錯丁（掛け違いだ）！」

上海人は、まず電話の相手が出たら、「お宅はどちら」と訊く。それだけ掛け違いが多いということだ。朝っぱらから間違い電話をかけて、のっけから「お宅はどちら」とはなにごとか！